

駿府城下町再発見

駿府城は日本のシンボルであった

駿府城は天下人となった大御所・徳川家康公が居城した天下の名城、大航海時代に来日した外国人は、大御所の居城であった駿府を目指して日本に来たのです。

元東京大学大学院教授のロナルド・トビ博士は、日本人は余りにも駿府静岡の事を知らないと指摘し、「駿府は世界の中の駿府」「家康公は世界の中の家康」であったことを忘れてはならないと言っています。以下、世界からも注目された駿府城についてみてみましょう。



渡辺重明画



すんぷ夢ひろば提供



リチャードダルトンの押絵より

大航海時代の終着点、それは駿府城

17世紀の世界は、ヨーロッパの国々が航海時代に突入し、ポルトガル・スペイン・イギリス・オランダの国々は、国王が中心となって、黄金に埋め尽くされていたというマルコポーロの『東方見聞録』に刺激され、「黄金の国ジバング」（日本）を探るために地球規模で活動していた時代です。しかも、その終着点が駿府だったのです。

駿府城天守は、イギリス・スペイン・オランダでも知られていました。この頃の日本では、名古屋城もまだ未完成であり、駿府城は江戸城天守よりも豪華でした。理由は駿府城が、大御所の城であったためです。そんな城と天守が駿府城公園に聳えていたのです。

駿府城には、イギリス・オランダ・スペインからも国王使節が家康を訪問していました。オランダ人のジャックス・ベックは、『駿府旅行記』を著し、駿府城で家康の通訳として活躍したウィリアム・アダムズについても記しています。

駿府城下町の変遷

天下人・徳川家康公の城下町から城主の居ない城下町へ

「駿府」は、日本全国と世界中からも注目された大御所・徳川家康公の聖地でした。ところが家康公が亡くなると、段階的に駿府は城主の居ない寂しい城下町となり、旗本が支配する城代政治の舞台となります。以下、駿府城下町の変遷を、駿府城下町絵図から見てみましょう。



◇「駿府城下町図」（岐阜県中津川市苗木遠山資料館蔵）

慶長・元和年間（1607-16）頃の「駿府城下町絵図」で、大御所時代当時の賑わいを現わしています。この頃の駿府城下町は、人口12万あったと伝えられ、パリやロンドンよりも大きな街でした。

また駿府は、大御所徳川家康公のお膝元のため、日本一綺麗な街として整備され、国内はもとより駿府を訪れた外国人からも注目されていました。スペイン人のフィリピン臨時総督であったドン・ロドリゴは、この日本がキリスト教の国であったら私はマドリッドからここ駿府で年金生活をしたとも記録に残されるほどでした（『ドン・ロドリゴ日本見聞録』）。

大御所時代の駿府城下町は、駿府城を含めた武家地（武士の居住地）の面積が全体の四割五分と言われています。一方、町方（町人居住地）が四割、それにお寺と神社の付属地（墓地を含む）が一割五分を占めていたと言われています。



◇「駿府城下町俯瞰図」（静岡新聞社蔵）

この絵図は、宝永年間（1707-10）頃に描かれた、「駿府城下町俯瞰図」です。この絵は、現在の駿河区向敷地の徳願寺辺りから著名な土佐派の画家が描いたものと想像されています。

この絵からも、家康公没後90年余り経過した駿府城下町は、侍が既に江戸に引き上げ、城主の居ない城下町と駿府城となっていることがわかります。上の絵図とこの絵図を比較すると、武士の居住地は既に農地となっています。比較して見て下さい。



◇「明治初頭駿府城下町絵図」（旧版『静岡市史』三巻 所収）

明治11年（1879）の頃の駿府城下町であり、この頃の駿府の街の人口は3万人余の東海道府中宿として知られていました。